

日本の生涯学習における Computer Mediated Learning のニーズと可能性

西 岡 正 子

本論文は、佛教大学総合研究所「学習ニーズの高度化に対応する高等教育機関のあり方に関する調査」の調査結果をもとに、日本におけるコンピューターを使った学習 C.M.L. (Computer Mediated Learning) の今後の可能性を考察するものである。

上記調査は、総合研究所の学習ニーズの高度化に対応する高等教育機関のあり方に関する研究の一つとして佛教大学白石克己教授を主任に、富田英典教授、緒方由紀助教授、黒田恭史助教授、大阪電気通信大学金田啓稔講師、及び筆者の6名による研究の一つとして実施された。

調査目的は C.M.L. (Computer Mediated Learning) を使うことに対するレディネス (readiness), 能力 (ability), 希望 (willingness), 可能性 (possibility) 等を明らかにし、今後の高等教育機関の継続教育のあり方を考えるである。調査期間は2001年9月1日～2001年10月31日である。調査対象は、成人単位取得学生として佛教大学通信教育課程学生, 成人学習者として京都府亀岡市ガレリアかめおか主催講座受講生及び、亀岡市立図書館来訪者、及び山形県における生涯学習フェスティバル来訪者の計875名である。

調査方法は、学習会場来訪者にアンケート用紙を配布し、その場で自由意志にもとづき回収を行った。統計処理は金田講師が担当し、SPSSを使用して行われた。また、本調査の妥当性などに関する研究は金田講師によって別の論文にまとめられている。日本における調査と同時にコンピューターが世界で最も普及し、Computer Mediated Learning が発達しているカナダの成人学習者を対象とした調査も行われた。その結果と考察はカナダのカルガリー大学 (University of Calgary) 助教授フェイ・ワイゼンバーグ博士 (Dr. Faye Wiezenberg) と筆者により論文としてまとめられている。

表1 調査対象者の性と年齢階層

			年齢階層					合計
			30歳未満	30歳代	40歳代	50歳代	60歳以上	
性別	男性	度数 %	83 28.3	41 14.0	39 13.3	48 16.4	82 28.0	293 100
	女性	度数 %	158 28.0	112 19.8	103 18.2	88 15.6	104 18.4	565 100
合計		度数 %	241 28.1	153 17.8	142 16.6	136 15.9	186 21.7	858 100

欠損 17

表2-1 職場のパソコンの有無

性				年齢階層					合計
				30歳未満	30歳代	40歳代	50歳代	60歳以上	
男性	職場のパソコンの有無	ある	度数	23	28	30	36	14	131
			職場のパソコンの有無の%	17.6	21.4	22.9	27.5	10.7	100.0
			年齢階層の%	46.9	73.7	81.1	80.0	37.8	63.6
		ない	度数	26	10	7	9	23	75
			職場のパソコンの有無の%	34.7	13.3	9.3	12.0	30.7	100.0
			年齢階層の%	53.1	26.3	18.9	20.0	62.2	36.4
	合計	度数	49	38	37	45	37	206	
		職場のパソコンの有無の%	23.8	18.4	18.0	21.8	18.0	100.0	
		年齢階層の%	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	
女性	職場のパソコンの有無	ある	度数	59	50	48	27	9	193
			職場のパソコンの有無の%	30.6	25.9	24.9	14.0	4.7	100.0
			年齢階層の%	55.1	67.6	65.8	61.4	30.0	58.8
		ない	度数	48	24	25	17	21	135
			職場のパソコンの有無の%	35.6	17.8	18.5	12.6	15.6	100.0
			年齢階層の%	44.9	32.4	34.2	38.6	70.0	41.2
	合計	度数	107	74	73	44	30	328	
		職場のパソコンの有無の%	32.6	22.6	22.3	13.4	9.1	100.0	
		年齢階層の%	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	

男性： $\chi^2(4)=28.16$, $p<0.001$ 女性： $\chi^2(4)=14.79$, $p<0.01$

1. 日本における調査結果とC.M.L.の可能性

調査対象計 875 名の内、女性が 565 名、男性が 293 名、不明 17 名と女性が 6 割以上を占めた。また年齢も表 1 に示されているように、60 歳以上の高齢者参加が

表 2-2 自宅のパソコンの有無

性				年齢階層					合計
				30歳未満	30歳代	40歳代	50歳代	60歳以上	
男性	自宅のパソコンの有無	ある	度数	51	30	30	39	38	188
			自宅のパソコンの有無の%	27.1	16.0	16.0	20.7	20.2	100.0
			年齢階層の%	66.2	75.0	83.3	81.3	50.7	68.1
		ない	度数	26	10	6	9	37	88
			自宅のパソコンの有無の%	29.5	11.4	6.8	10.2	42.0	100.0
			年齢階層の%	33.8	25.0	16.7	18.8	49.3	31.9
	合計	度数	77	40	36	48	75	276	
		自宅のパソコンの有無の%	27.9	14.5	13.0	17.4	27.2	100.0	
		年齢階層の%	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	
女性	自宅のパソコンの有無	ある	度数	108	82	74	58	33	355
			自宅のパソコンの有無の%	30.4	23.1	20.8	16.3	9.3	100.0
			年齢階層の%	70.1	75.2	77.1	73.4	43.4	69.1
		ない	度数	46	27	22	21	43	159
			自宅のパソコンの有無の%	28.9	17.0	13.8	13.2	27.0	100.0
			年齢階層の%	29.9	24.8	22.9	26.6	56.6	30.9
	合計	度数	154	109	96	79	76	514	
		自宅のパソコンの有無の%	30.0	21.2	18.7	15.4	14.8	100.0	
		年齢階層の%	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	

男性： $\chi^2(4)=19.16$, $p<0.001$ 女性： $\chi^2(4)=29.00$, $p<0.001$

21.7%を占めている。本調査の調査対象者は集合学習形態参加者である。日本における生涯学習者は集合学習形態への参加が多く、またその学習者は高齢者と専業主婦が多くを占めている。その点で本調査は現在の成人学習にコンピューターを導入、または学習そのものをC.M.L.に置き換える際のニーズの検討に有効な示唆を与えてくれるものと期待できる。以下、二元配置分散分析結果を中心に分析し、そのニーズと可能性等を考察する。

コンピューターの所有（問1、2）は、「仕事場に自分が使うパソコンがある」と答えた男性が63.6%、女性が58.8%（表2-1参照）、「自宅に自分が使うパソコンがある」と答えた男性が68.1%、女性が69.1%の割合である（表2-2参照）。コンピューターを使った生涯学習を始めるにはパソコンは実際十分に普及しているとは言い難い。また、年齢と職場・自宅のパソコンの有無において有意差（ $p<0.01$ ）が表れていることから成人学習へのコンピューターの導入は、全体の普及率をみるのではなく年齢を考慮する必要がある。

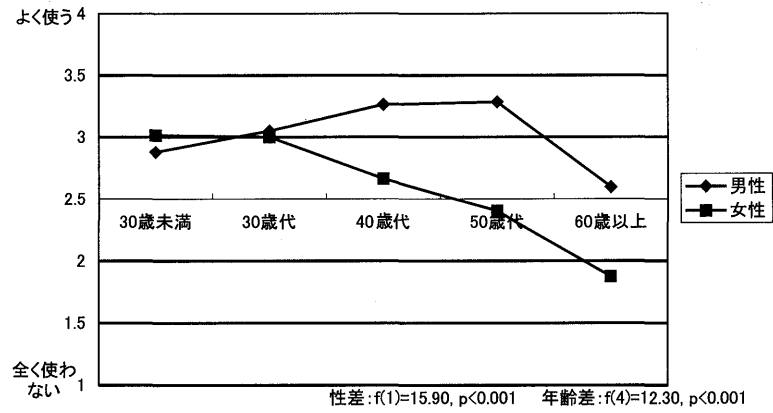


図 1-1 ワープロ機能の使用

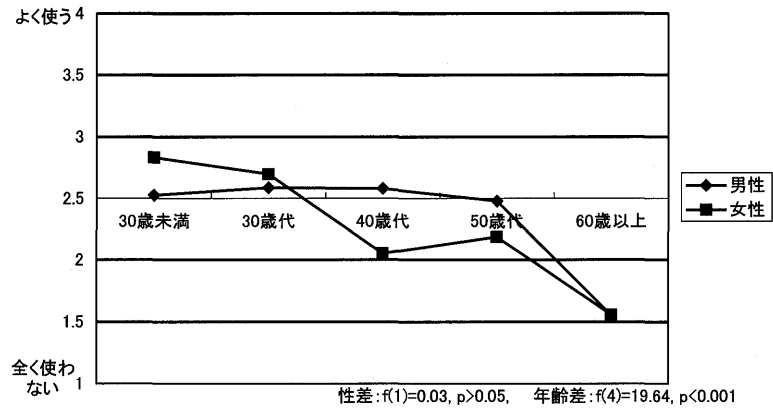


図 1-2 電子メールの使用

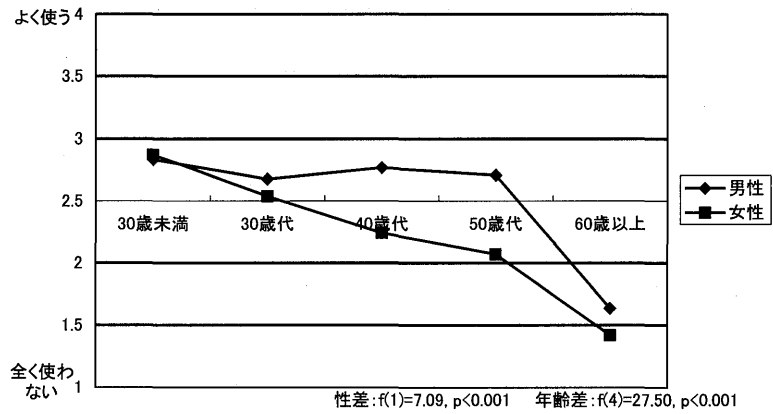


図 1-3 インターネットの使用

この他、パソコンの機能の使用を問うた問3.4.5においてもワープロ機能（問3）、電子メール（問4）、インターネット（問5）のそれぞれにおいて年齢間に有意差（ $p<0.001$ ）がみられた。（図1-1, 2, 3参照）

パソコンの有無について男女間に有意な差は見られなかったが、パソコンの使用機能に関して「ワープロ機能の使用」および「インターネットの使用」に関しては、男性の方が良く使用しているという結果が出た（ $p<0.001$ ）。男女とも一番良く使われているのはワープロ機能であり、「よく使う」と「時々使う」を合わせると63.2%であり、特に男性は44.5%が「よく使う」（女性33.7%）と回答している。しかし、インターネットに関しては男女の平均で「よく使う」と「時々使う」を合わせて52.1%であり、電子メールは同様に47.6%である。電子メールの使用に関しては男女間に有意な差がみられない。日本においては携帯電話の電子メール機能使用が普及しているという諸外国に無い特殊な状況が作用しているものと考えられる。まだまだ、今までの生涯学習参加者はコンピューターに親しみ、自由に使いこなすところまではいたっていない。コンピューターの普及と活用の一般的な数字をみるのではなく学習対象者を考えた導入が考慮される必要があることを示している。

また、問6.7のコンピューターを使う能力、自信においても、性と年齢による有意差（ $p<0.001$ ）がみられた（図2-1, 2参照）。各年代とも男性の方が自己評価は高い。男性では40歳代の評価が能力、自信において30歳代や、50歳代より大きく下まわるのが興味深い。問4.5の電子メールやインターネットの使用においても40歳代は30歳代や50歳代よりも「よく使う」、「時々使う」が少ないことから、パソコンを充分活用していないということがいえる。いずれにしても、10点満点の評価で、どの年代も5点以下と大変低い。

コンピューターのワープロ機能およびインターネット機能の使用頻度に男女間の差異がみられたのと同様、コンピューターを使う能力と自信の自己評価においても男女間に有意な差がみられた。すなわち男性の方が能力（ $p<0.001$ ）、自信（ $p<0.001$ ）においても高い評価をしている。英語の能力においても男性の自己評価が女性を上回っている（ $p<0.01$ ）（図2-3参照）。30歳未満男女および30代、50代の男性がコンピューター使用に関しては能力自信ともに高いということが出来る。

問8の英語の能力の自己評価は全体の平均値が3.10と男女とも非常に低い。今後インターネットを使った学習を進める際の種々のデータベースの活用及び外国の大学、大学院のC.M.L.の活用を考えた場合、語学力が大きな障壁となることが予想される。今日においても海外の大学、大学院のC.M.L.の利用は、日本人には語学力の

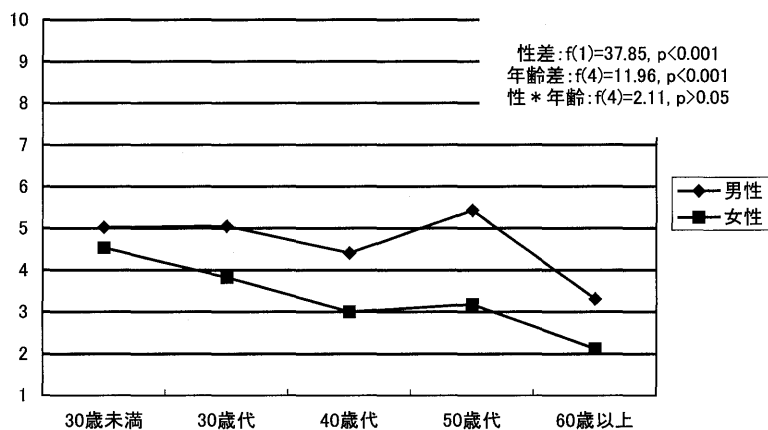


図 2-1 コンピュータを使う能力自己評価

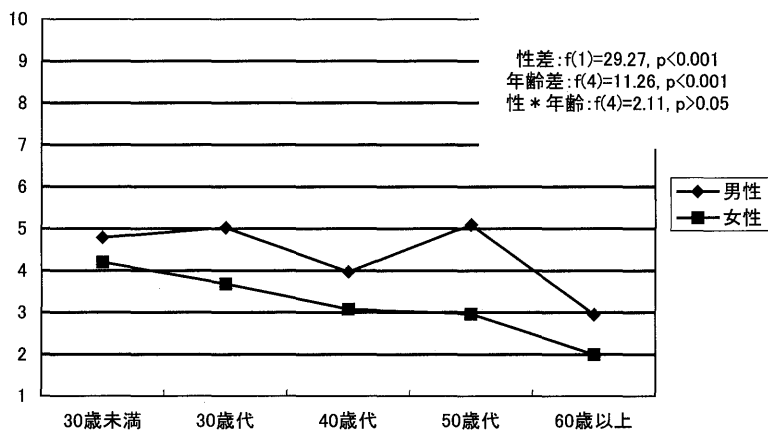


図 2-2 コンピュータを使う自信自己評価

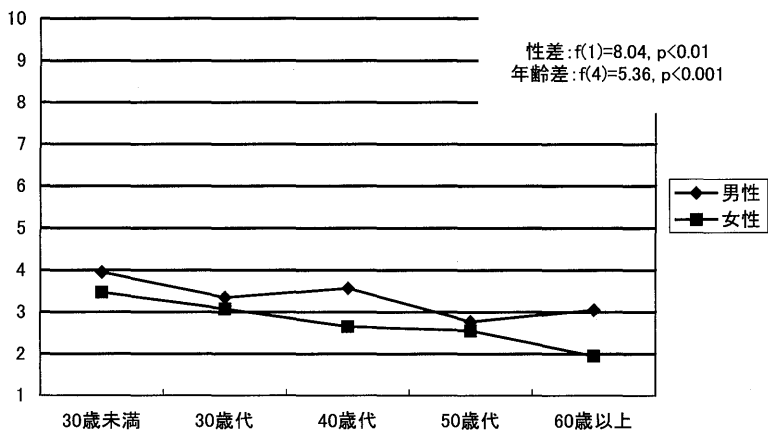


図 2-3 英語の能力自己評価

点で困難であることと符合する結果となっている。

今までの生涯学習について尋ねた問9～14を年齢別にみると（図3・表3参照）40歳代からは「q10 大学以外の主催する講座・教室・セミナー」が一番多くなっている。さらに年齢が高くなるほど多くなり年齢による有意な差がみられる。同様に大学の主催する講座（q9）やテレビによる学習（q10）も年齢と伴に多くなる。いずれの年代においても学習にインターネットを活用している（q14）とは言い難い状態である。

男女間では、「q11 郵便物による通信教育を受けたことがある」「q12 テレビによる通信教育を受けたことがある」に有意差（ $p<0.01$ ）が出ており、女性の方が高い数値となっている。男女とも、「q14 コンピューターを使いインターネットで教育を受けた」が総ての取り組みの中で最も低い数値となっている（表3参照）。今日システムティックにインターネットを活用した学習プログラムが普及していないことから、生涯学習の中にインターネットを活用することは、日本において一般市民には現状としてほど遠いものであるということが出来る。

将来の生涯学習に対する問15～23に対しては、現在も取り組みの多い「q15 大学の主催する講座」や「q16 大学以外の主催する講座」に強い希望がみられる。「q20 コンピューターを使いインターネットで教育を受けたい」というものが、現在ほとんど使用されていないにも関わらずどちらともいえないに近い状態にある（図4参照）。何らかの形でコンピューターを活用することに期待していると言うことができる。今後、具体的な活用方法が提示された場合、この数字は上がるのではないかと予想される。

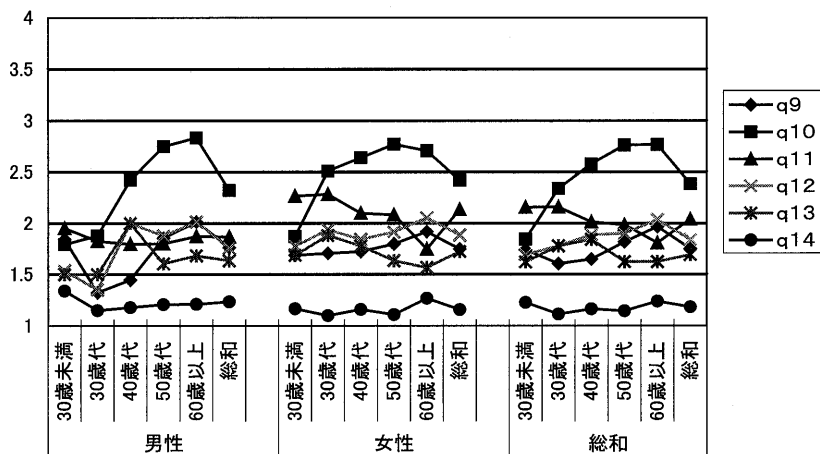


図3 現在までの生涯学習の取り組み

表3 二元配置分散分析結果

	性別	年齢
q9: 大学の主催する講座を受けたことがあるか		*
q10: 大学以外の主催している講座を受けたことがある		**
q11: 郵便物による通信教育を受けたことがある	**	
q12: テレビによる通信教育を受けたことがある	**	*
q13: ラジオによる通信教育を受けたことがある		
q14: インターネットで教育を受けたことがある		

**: $p<0.01$ *: $p<0.05$

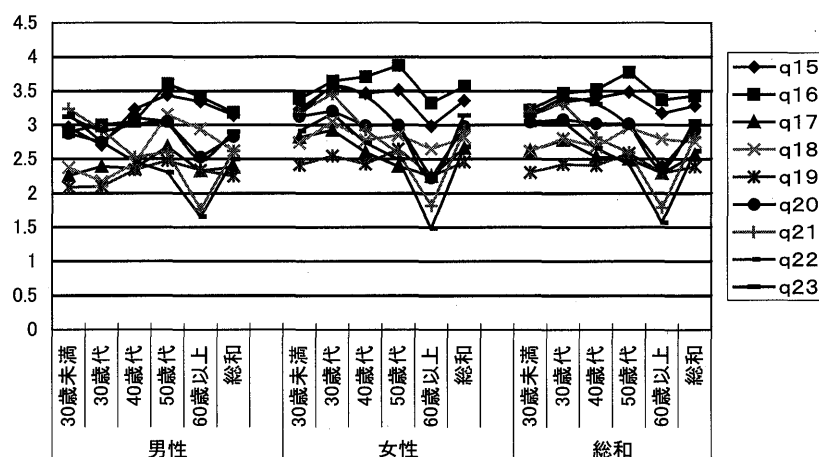


図4 将来の取り組み

年齢別にみた場合もコンピューター使用に関しては50歳代と60歳代以上がネガティブであるのに対して、20.30.40歳代はポジティブで年代間に有意な差が見られた($p<0.01$) (表4参照)。高齢者以外はコンピューターによる学習に漠然とした期待を持っているといえることができる。

この他年齢によって有意な差が表れたのは、大学以外の主催する講座 (q16) である。これは50歳代が一番高くなっている。大学の正規の授業の受講 (q21)、大学院の正規の授業の受講 (q22)、大学での聴講 (q23) は逆に50歳代で低い数値となり60代で極端に低くなる。

また、男性と女性を比較した場合、将来の生涯学習に対しては、「大学の主催する講座」(q15)をはじめ、「大学以外の講座」(q16)、「郵便物」(q17)、「テレビ」(q18)、「ラジオ」(q19)、は女性の方が男性より積極的で、男女間に有意差がみられたにも関

表4 二元配置分散分析結果 (q15-23)

	性別	年齢
q15: 将来大学の主催する講座を受講したい	*	
q16: 将来大学以外の主催する講座を受講したい	**	**
q17: 将来、郵便物による通信教育を受けたい	*	
q18: 将来、テレビによる通信教育を受けたい	*	
q19: 将来、ラジオによる通信教育を受けたい	*	
q20: 将来、コンピュータを使った教育を受けたい		**
q21: 将来大学の正規の授業を受けたい		**
q22: 将来大学院の正規の授業を受けたい		**
q23: 将来大学で聴講したい		**

**: $p<0.01$ *: $p<0.05$

わらず、「q20 コンピューターを使いインターネットで教育を受けたい」、「大学の正規の授業」(q22)、「大学での聴講」(q23)は男女間に有意差がみられなかった(表4参照)。これらは年齢によって有意さが表れたものである。

「将来コンピューターを使いインターネットで教育を受ける」は男女間で有意差はなかったがインターネットを利用した学習の魅力を問う問45～49のすべてにおいて、女性の方が有意に高い数値を示している(図7・表7参照)。インターネットを利用した教育・学習が具体的に実施可能になった場合、女性の潜在的ニーズが、学習行為に結び付く可能性が高いのではないと思われる。

インターネットで各種の授業を受けることができた場合を想定して、答えを得た質問(問25～34)では、現在も生涯学習の機会として集合学習形態で多く提供されて

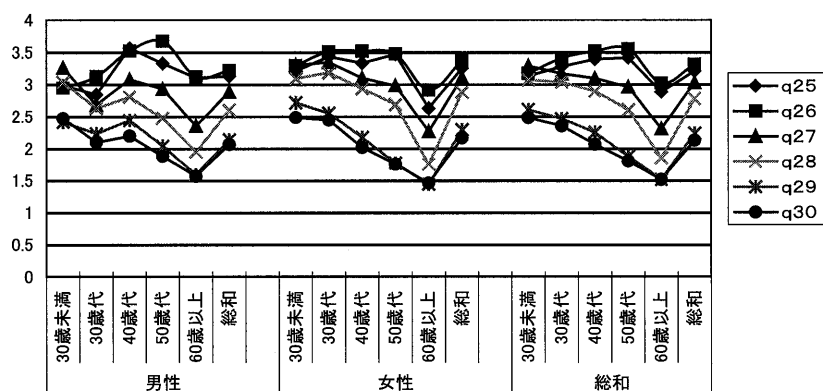


図5-1 インターネットでの学習について

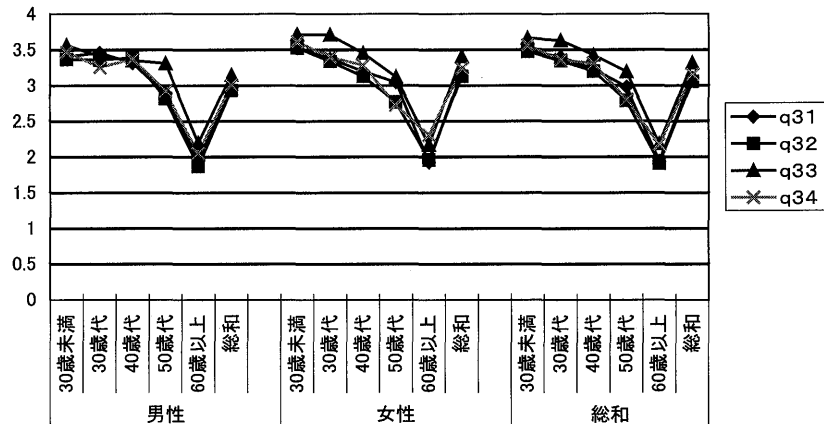


図 5-2 インターネットでの学習目的

表 5-1 二元配置分散分析検定結果 (q25-34)

	性別	年齢
q25: 大学主催の公開講座を受けたいと思うか		**
q26: 大学以外の主催している講座を受けたいと思うか		**
q27: 日本の大学の授業を受けたいと思うか		**
q28: 日本の大学院の授業を受けたい		**
q29: 海外の大学の授業を英語で受けたい		**
q30: 海外の大学院の授業を英語で受けたい		**
q31: 大学で学習するならば、職業に関係するものを学習したいと思う		**
q32: 大学院で学習するならば、職業に関係するものを学習したいと思う		**
q33: 大学で学習するならば、資格に関わるものを学習したい		**
q34: 大学院で学習するならば、資格に関わるものを学習したい		**

** : $p < 0.01$ * : $p < 0.05$

いる「大学主催の公開講座」「大学以外の主催している講座・教室・セミナー」への利用がポジティブな傾向を示しているが、日本の大学・大学院での授業や海外の大学・大学院での授業を受けるに対してはネガティブである。年齢と伴に得点は低くなり、60歳以上において最も否定的な結果が表れている。(図 5-1 参照)。総てにおいて年齢により有意な差が出ている。すなわちここでも成人学習者の対象別取り組みの必要性が表れている。

性別・年齢による二元配置分散分析検定の結果において男女間には有意差はみられなかった。この結果は「将来コンピューターを使いインターネットにより教育を受け

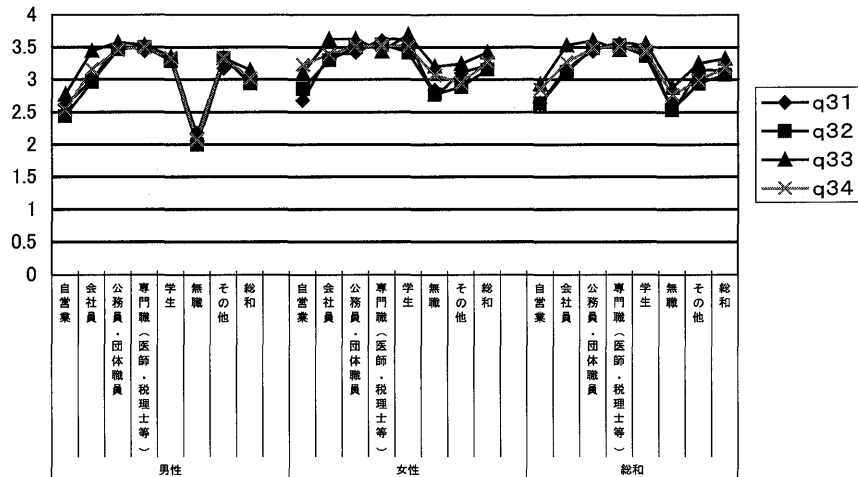


図 5-3 職業別学習目的

表 5-2 二元配置分散分析結果 (q31-34) (職業と性別)

	性別	職業
q31: 大学で学習するならば, 職業に関係するものを学習したいと思う		**
q32: 大学院で学習するならば, 職業に関係するものを学習したいと思う		**
q33: 大学で学習するならば, 資格に関わるものを学習したい	*	**
q34: 大学院で学習するならば, 資格に関わるものを学習したい	*	**

**: $p<0.01$ *: $p<0.05$

たい」に男女間の有意差が見られなかったことと一致する。性別よりもインターネットを通した学習は年齢と関わりがあるということが出来る。

インターネットを使った大学や大学院での学習目的は、職業及び資格に関するものへの希望において年齢により有意な差がみられている。すなわち 30 歳未満が最も高くなっており、年齢と伴に得点が下がっていくが (図 5-2 参照), さらに、職業別においても有意な差がみられた。すなわち会社員、公務員・団体職員、専門職及び学生が高い希望を示し、自営業や無職等と有意な差が現れている (図 5-3 参照)。性別・職業による二元配置分散分析結果では大学・大学院における資格に関わる学習において男女間に有意な差が表れた。女性の方がインターネットを活用して大学や大学院で資格に関わる学習をしたいと望んでいる。

若い層、女性および職業によっては将来インターネットを活用して職業や資格に関

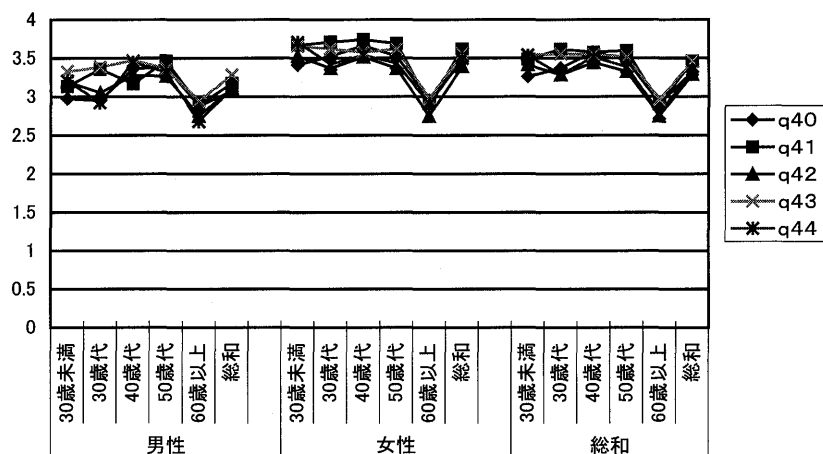


図6 対面式授業への期待

表6 二元配置分散分析検定結果 (q40-44)

	性別	年齢
q40: インターネットだけでなく、対面式授業も受けたい	**	**
q41: インターネットコースにおいては直接的な知識の伝達を受けたい	**	**
q42: インターネットコースにおいては教師・学生間の関係を築きたい	*	**
q43: インターネットコースにおいては教師の人柄を感じたい	*	**
q44: インターネットコースにおいては学生同士のつながりを築きたい	**	**

**: $p<0.01$ *: $p<0.05$

する学習を期待していると考えることができる。

インターネットと実際に顔を合わせる対面式授業との関係、また対面式授業における期待を問うた問40～44では、30歳未満、30歳代、40歳代、50歳代にポジティブな回答がみられた(図6参照)。また、インターネットコースと対面式授業に関しては、すべての項目で男女間に有意な差がみられた(表6参照)。すなわち女性の方が対面式授業を希望し、対面式授業の中で、教師との関係および学生間の関係の構築に期待をもっている。今後インターネットを使ったプログラムを考える上で考慮しなければならないことである。

本論文では十分に論じられないが、すでにインターネットを使った学部や院の授業を実施している欧米の大学の中には、対面式授業を採り入れているところが多く、対

面式授業の中で学生同士の相互学習を促進し、教師と学生及び学生同士のつながりを深めているものが多くみられる。日本における実施の参考となるであろう。

では実際インターネットを利用した学習ということの何に人々は魅力を感じているのだろうか。問45～49において最も高い得点を得ているのが「q46 都合の良い時間に受講できる」という時間的な利便性である。年齢別には、30歳未満、30歳代、40歳代、50歳代が自分の学習可能な時間に学習できることを魅力に感じている（図7参照）。男女間の差はすでに見たように、女性が有意に高い得点をつけている。

C.M.L.においてもディスカッションは可能であり、すでに欧米で実施されているプログラムにおいては、C.M.L.用に開発されたソフトを使って対面式授業と同じように、またはそれ以上にディスカッションを行っている。今回の調査では男性も女性もまたどの年齢層も対面式授業においてディスカッション（q50）を肯定している。またインターネットを通したディスカッション（q53）に関しても60歳以上の女性以外は平均値として肯定的数値が表れた。ただ、その必要性においては、対面式授業においてよりもインターネットを通したディスカッションが低い値を示している。しかし、実際自分のこととなるとディスカッションで意見を述べる（q51）やディスカッションが好きである（q52）では上記2問に対してより数値が下がる。これらは女性に顕著に表れている。（図8参照）性別・年齢による二元配置分散分析結果においては、性別、年齢とも有意差はみられなかった。

興味深いのは職業別においてディスカッションの対面式授業における必要性（q50）、ディスカッションにおいて意見を言うことができる（q51）およびディスカッション

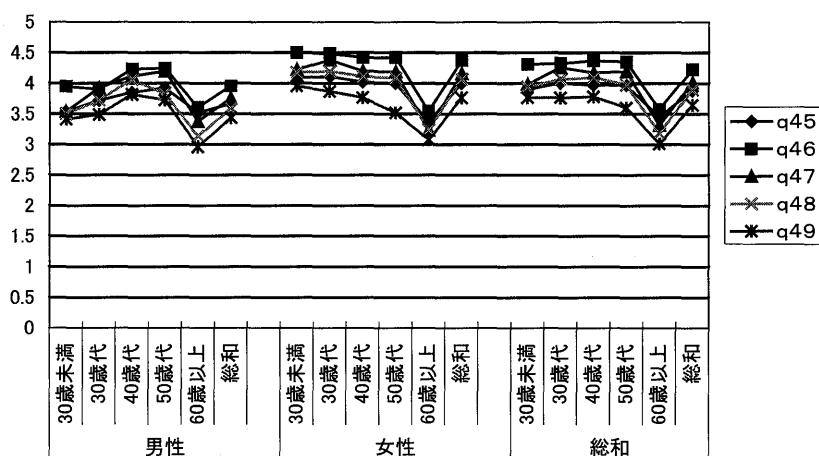


図7 インターネット学習の魅力

表 7 二元配置分散分析結果 (q45-49)

	性別	年齢
q45: 繰り返し同じ講座を受けることができる	**	*
q46: 都合の良い時間に受講できる	**	**
q47: 通学しなくてもよい	**	**
q48: 電子メールを利用した意見交換ができる	**	**
q49: チャットによる討論ができる	*	**

**: $p<0.01$ *: $p<0.05$

が好きである (q52) の 3 問に有意な差が出ていることである (図 8 参照)。専門職が高い数値を示しているところから職業によるディスカッションの経験の有無が影響を与えていると考えられる。

また、性別・職業による二元配置分散分析結果では男性の方がディスカッションが好きという有意な結果が出た。これも職業における経験の有無から生まれたものではないかと思われる。

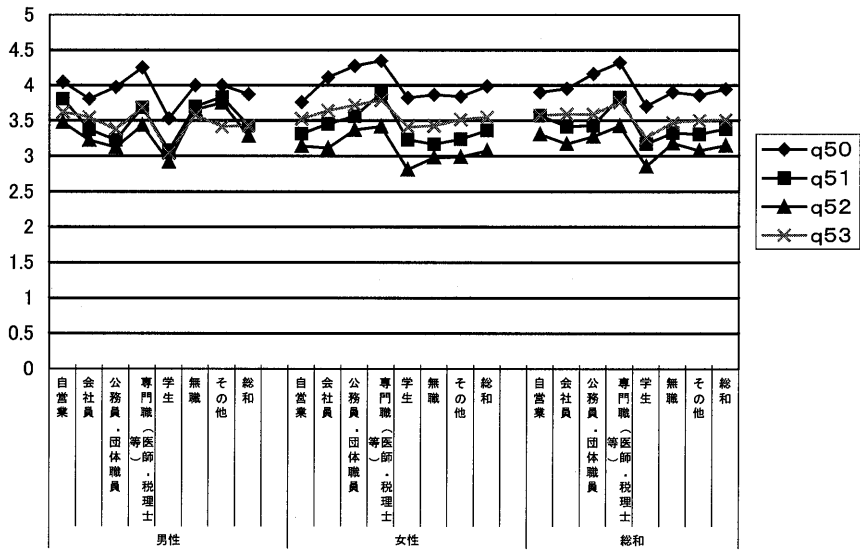


図 8 ディスカッションについて (職業・性別)

表8 二元配置分散分析結果 (q50-53) (職業・性別)

	性別	職業
q50: ディスカッションは対面授業において必要である		**
q51: ディスカッションでは意見を言うことができる		*
q52: ディスカッションは好きである	*	*
q53: インターネットコースにおいてもインターネットを通した ディスカッションは必要である		

** : $p < 0.01$ * : $p < 0.05$

以上の結果から、まだ一般成人はコンピューター自体にあまりなじんでいず、コンピューターの機能の使用や、それを使う能力、自信にも性別や年齢によって差異があることが明らかになった。一般の集合学習形態参加者に対してコンピューターを導入したり学習をC.M.L.に置き換えることには、まだレディネスが整っていないと言うことが出来る。そのことは、将来の生涯学習の取り組みにおいて、現在多く行われている「将来大学の主催する講座を受けたい」や「将来大学以外の主催する講座・教室・セミナーなどを受講したい」が3以上の数値でニーズが表れているにもかかわらず、「将来コンピューターを使いインターネットで教育を受けたい」は3の「どちらともいえない」にとどまっているところに表れている。

このように現在のところレディネスが整っているとは言いが、時間的拘束がない等、コンピューターを使った学習への期待も高く現在コンピューターを使ったシステムティックな学習が無いに等しいにもかかわらず、学習者によっては将来においてコンピューターを使って学習したいと考えている人達があり、今後の可能性は十分あるといえることができる。

現段階では、インターネットを活用した生涯学習を進めるにあたっては、コンピューターの普及等の一般的な数値を見るのではなく、講座内容やプログラムの対象者を十分考慮する必要があると思われる。

本調査の限界は、集合学習形態の生涯学習参加者が調査対象の多くを占めていることから、コンピューターを使った個人学習形態に対する嗜好の違いが作用していることも考慮しなければならないことである。また、コンピューターを使った学習、インターネットを活用した学習が実際普及していない現状では、その有効な活用を十分イメージすることが出来ない。従って、積極的に活用したいと望むこと自体が困難であるということもできる。

コンピューターを使った学習と言えば単に通信教育の郵便部分をeメールに置き換

えることや、データベースの活用を思うかべる人も多いかもしれない。調査結果にも表れているように未だ、日本においてはコンピューターを使った学習ソフトの活用が一般に知られていない。欧米では既に様々なソフトが開発されており、教室での授業と同じことが可能である上にライブラリー機能として様々なデータベースの活用がソフトを使うことによってC.M.L.の中で有効に活用でき、C.M.L.を使ってこそその学習というものが展開されている。既に遠隔教育の学会や研究会では教員はより効果的なC.M.L.独自の学習方法を研究している。たとえば2003年5月に行われたカナダ大学継続教育学会の発表の一つの“Implementing Activity-Based E-Learning”においては、学習者がコンピューターを通じた学習でよりアクティブに楽しんで学習するために教員のテストやレポートの出題を工夫する術の研究が行われている。また、C.M.L.は優れたソフトにより小学校、中学校、高校でも活用され多くの人々は成人になる前にC.M.L.に親しんでいる。

今後、日本においてC.M.L.を使うに当たっては学習対象者を考え、各レベルあったソフトの使用または開発が必要となるであろう。

参考文献

1. Rod Corbett and Julie Kearns, “Implementing Active-Based E-Learning” Presented in Canadin Association of University Continuing Education, 2003.
2. Bonnie Jeffery and Mona Cdkerm, “Evaluation of an internet-delivered indtductory social work course” Presented in Canadin Association of University Continuing Education, 2003.
3. Facilitating E-Learning Course Syllabus, <http://blackboard.ucalgary.ca>
4. Teaching & Learning Online Certificate for teacher professional development. http://www.cbelearn.ca/pd_certificate.html
5. Calgary board of Education online learning <http://www.cbelearn.ca/main.html>

資料 1. (質問紙)

次の質問について該当する数字を回答欄に記入してください。

性 別 ①男性 ②女性 ----->

年 齢 -----> 歳

最終学歴 ①中学校卒 ②高校卒 ③短大卒 ④大学卒
⑤大学院卒 ⑥専門学校卒 ⑦各種学校卒 ----->

職 業 (職業をもちながら学業を続けている人は⑤学生も記入してください)
①自営業 ②会社員 ③公務員・団体職員 ----->
④専門職 (医師・税理士 等) ⑤学生 ⑥無職 ⑦その他

居住地域 都道府県 市町村群 郵便番号 〒 -

本格的にコンピュータを使い始めたのはいつですか -----> 西暦 年 月

自宅または職場から、あなたが利用できる範囲に大学がありますか -----> ①ある ②ない

コンピュータの所有についておたずねします。該当するものに○印を付けてください。

1. 仕事をもっている人は仕事場にあなたが使うパソコンがありますか -----> ①ある ②ない
2. 自宅にあなたが使うパソコンがありますか -----> ①ある ②ない

パソコンの使い方についておたずねします。次の機能についてどの程度使いますか。該当する番号に○印を付けてください。

	全く 使わ ない	全 く 使 わ な い	あ ま り 使 わ な い	時 々 使 う	よ く 使 う
3. ワープロ機能 ----->	①	②	③	④	
4. 電子メール (E-mail) ----->	①	②	③	④	
5. インターネット ----->	①	②	③	④	

次の事柄について自己評価した場合何点を付けますか。回答欄に点数を記入してください。

6. コンピュータを使う能力を 10 点満点で評価してください -----> 点

7. コンピュータを使う自信を 10 点満点で評価してください -----> 点

8. 英語の能力 (読み・書き) を 10 点満点で評価してください -----> 点

生涯学習の取り組みについておたずねします。該当する番号に○印を付けてください。

	全 く な い	あ ま り な い	少 し あ る	よ く あ る
9. 大学の主催する講座を受けたことがある ----->	①	②	③	④
10. 大学以外の主催する講座・教室・セミナーなどを受講したことがある ----->	①	②	③	④
11. 郵便物による通信教育を受けたことがある ----->	①	②	③	④
12. テレビを利用して学習したことがある ----->	①	②	③	④
13. ラジオを利用して学習したことがある ----->	①	②	③	④
14. コンピュータを使いインターネットで教育を受けたことがある ----->	①	②	③	④

	思 全 く な い	思 あ ま り な い	い ど ち な い	少 し 思 う	そ う 思 う	非 常 に 思 う
15. 将来、大学の主催する講座を受けたい ----->	①	②	③	④	⑤	
16. 将来、大学以外の主催する講座・教室・セミナーなどを受講したい ----->	①	②	③	④	⑤	
17. 将来、郵便物による通信教育を受けたい ----->	①	②	③	④	⑤	
18. 将来、テレビを利用して学習したい ----->	①	②	③	④	⑤	
19. 将来、ラジオを利用して学習したい ----->	①	②	③	④	⑤	
20. 将来、コンピュータを使いインターネットで教育を受けたい ----->	①	②	③	④	⑤	
21. 将来、大学の正規の授業を受けたい ----->	①	②	③	④	⑤	
22. 将来、大学院の正規の授業を受けたい ----->	①	②	③	④	⑤	
23. 将来、大学で聴講したい ----->	①	②	③	④	⑤	
24. 将来、大学の施設でスポーツ活動をしたい ----->	①	②	③	④	⑤	

